様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｈ００６３６

研究課題名（和文）20世紀前半のヴァイオリン演奏様式の包括的研究――野澤コレクションを活用して

研究課題名（英文）A Comprehensive Research on Style of the Violin Playing in the First Half of the 20th Century

研究代表者
大角　欣矢（Osumi, Kinya）

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：９０２３３１１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,676,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、鈴木鎮一の音楽家としての自己形成過程とスズキ・メソード誕生の背景を、レコード等新興メディアとの関わりなど社会文化的脈絡に着目しつつ検証した。演奏分析から、鈴木の演奏様式が師クリングラーとレコード聴取の両面を通じて形成されたことが明らかになった。1920年代以降のレコード文化の成長と熟成がその背景をなしており、彼の音楽活動も常にレコード聴取層との密接な関係性の中で行われていた。スズキ・メソード成立の背景には大正期以来の「天才教育」論と、「少国民」を一人残らず高度な能力を持つ人間に育てる戦時体制下の国民教育論があると見られる一方、レコードはその理念の実現を助ける効果的なツールであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来も個々の演奏家の演奏分析は行われてきたが、レコード等近代メディアの隆盛が演奏様式や演奏文化に与えた影響については十分検討されてきたとはいえない。また鈴木鎮一とスズキ・メソードについては、音楽教育学的な観点から多く研究されてきたが、彼の演奏自体やその形成過程、その歴史的意味について検討した研究はあまり見当たらない。本研究は、演奏の技法や様式の分析とその歴史的コンテクスト、とりわけ社会文化的背景に着目し、複数の異なる視点からそれら相互の関係性をあぶりだすことで、1920-30年代の日本の音楽文化の一側面に光を当て、世界に普及したスズキ・メソード成立の背景を、従来より幅広い視野から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examines the process of self-formation of Shinichi Suzuki as a musician and the background of the birth of the Suzuki Method, with a focus on the socio-cultural context, including his interaction with emerging media such as records. Analysis of his performances revealed that Suzuki's playing style was shaped by both his teacher Klingler and his listening to records. The growth and maturation of record culture since the 1920s formed the backdrop, and his musical activities were always closely linked with the record-listening audience. The background of the establishment of the Suzuki Method includes the theory of 'genius education' from the Taisho period and the wartime national education policy aimed at nurturing every 'young citizen' into a highly capable individual. At the same time, records were seen as an effective tool for realizing this vision.

研究分野：音楽学

キーワード：演奏分析　ヴァイオリン　レコード　鈴木鎮一　歴史的音源　メディア　早教育　スズキ・メソード

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2013 年、著名な SP レコード研究家、クリストファ・N・野澤氏（1924～2013）が生前に収集したクラシック音楽の歴史的音源（SP レコード約２万枚）を中心とする資料群が、東京藝術大学附属図書館に寄贈された。研究代表者はこの貴重なコレクションを学術研究のために役立てるための方策を模索してきた。野澤氏自身ヴァイオリンを奏したことから、このコレクションには非常に豊富なヴァイオリン音源が含まれている。このことから、これらの歴史的音源を活用してヴァイオリン演奏様式のあり方について調査する研究ができないかと考えた。

そこで、コレクションの主体をなす 20 世紀前半に由来する音源を活用し、同時期のヴァイオリン演奏様式の主な系譜やその変遷の解明へ向けた包括的基礎研究を行うことを計画した。しかし、実際に研究を進める中で、世界規模におけるヴァイオリン演奏様式の系譜とその変遷を追うという企図は、細部に光を当てた詳細な演奏様式の分析を行うには必ずしも適当ではないこと、また全体に広く浅い研究の結果得られる成果として、従来もおおよそ言われていることを追認する漠然としたものとなってしまうことが懸念された。そこで、研究組織内において討論を重ねる中で、特に日本発の特色あるケーススタディとして、近代日本におけるヴァイオリン文化の形成とレコードがそれに果たした役割に着目し、ヴァイオリンの教育と演奏に対し世界的影響を及ぼした鈴木鎮一とその周辺のヴァイオリニストたちの演奏研究を行うという着想が生まれ、改めてこれをテーマとして設定し直した。

２．研究の目的

本研究は、鈴木鎮一の演奏家・音楽教育者としての自己形成過程と、彼がスズキ・メソードを生み出すに至った背景を、レコード等の新しいメディアとの関わりを始めとする社会文化的脈絡に着目しつつ検証することを目的としている。鈴木は、当時新興のメディアであったレコードにいち早く着目し、それをシステマティックに音楽教育に採り入れた点で先駆的存在であった。従ってこのテーマ設定により、メディアのあり方と演奏スタイルの形成というトピックを結びつけた研究が可能となる。また、鈴木鎮一やスズキ・メソードについての研究自体は、音楽教育学的な観点を中心に従来から多くなされているものの、鈴木鎮一の演奏そのものや、その演奏様式の形成過程に焦点を当て、その歴史的意味について検討した研究はこれまでのところ見当たらず、この面からの検証も新しい試みといえる。

３．研究の方法

野澤コレクションの SP レコードは、一部演奏家毎に分類され保管されていたものを除き、大部分が未整理のまま段ボールや紙袋などに入れられた状態で寄贈され、包括的目録等も存在しなかったことから、最初のうちはヴァイオリン音源に的を絞ってレコードの整理と目録化に集中して取り組み、目録データベースの作成を進めた。このデータベースは、細部のチェックを経て将来的に東京藝術大学附属図書館ウェブサイトを通じて公開される予定である。

並行して、研究開始当初は、ヴァイオリンの演奏様式の系譜を辿る演奏研究を進めた。演奏様式の形成や変遷の要となるような演奏家のレコードをサンプルとしていくつか抽出し、それらの聴取を行いながら、同時代の演奏用エディションやヴァイオリン教本とのの照合も行いつつ検証するとともに、演奏技法や様式上の特徴をよく表すと思われる部分を抽出して、音響解析ソフト Sonic Visualiser による分析を行った。同ソフトの利用のためには SP レコードの再生音をデジタル音源データ化する必要があるため、客観的分析のために最適化されたデジタル化のための機器一式の選定と設置、及びそれらを用いた適切なデジタル化の手法についても研究を行った。これらの研究成果の一部は、実際に SP レコードを再生する蓄音機コンサートの開催を通じて一般に公表した。

その後、鈴木鎮一とその周辺に研究対象を絞り、研究組織による数回の研究会を通じて論点の整理や研究手法の立案を進めた。主な論点と研究方法は次の通り。

(1) 鈴木鎮一の演奏様式の特徴、及びその様式が形成されるに至った経緯や背景を、鈴木が残した録音音源（特に 1927～1928 年頃ドイツで録音されたフランクのヴァイオリン・ソナタ及び 1930～1940 年代のその他の音源）の分析、及び関連する同時期のヴァイオリニストたちの演奏との比較を通じて探る。

(2) コンピューターを用いた演奏分析の手法、特に音響解析ソフト Sonic Visualiser の原理と機能、特性とその限界についての理解を深め、客観的かつ適正で有効性の高い演奏分析の方法について検討する。

(3) 鈴木鎮一とレコードとの関わりに関し、彼がこの新興のメディアに着目し、音楽教育に活用するようになる経緯や背景について、当時のレコード文化のあり方を視野に入れつつ検討する。

(4) 鈴木鎮一の音楽家・教育家としての自己形成にとって、ヴァイオリン製造家であった父・政吉がどのような存在であり、彼との関わりはどのような意味や作用を持ったか検討する。

(5) 昭和戦前期までの日本において、フランクという作曲家とその作品は、例えば東京音楽学校において、或いはまた一般の音楽愛好家層において、どのような位置づけを持ち、どのような受

け止められ方をしていたか。東京音楽学校の演奏記録や、レコード愛好家たちの情報交換の場であったレコード雑誌の言説、また鈴木鎮一の音楽活動を鍵に探る。
(6) 鈴木鎮一が特に戦後に本格的に取り組むようになる「才能教育」が生まれる伏線として、戦前にどのような社会文化的環境や思想、言説、メディアの動きなどがあったのか。また、それらは鈴木の教育思想や実践に対しどのような作用や影響を及ぼしたと考えられるか。知識人の言説や新聞などのメディアにおける言説、教育政策等から見てとれる社会のあり方を基に探る。
　以上の研究の成果をとりまとめ、シンポジウムを開催して一般に公表する。

４．研究成果

　ここでは、前項後段で述べた鈴木鎮一を巡る研究に的を絞り、各項目毎に研究成果を報告する。これらの内容は、2023 年 10 月 21 日に東京藝術大学に於いて開催されたシンポジウム「鈴木鎮一と音楽の近代――SP レコード音源とその社会文化的背景の検証を通じて――」で発表された。同シンポジウムの報告書は、東京藝術大学附属図書館リポジトリに登載されている。URL は次の通り。https://geidai.repo.nii.ac.jp/records/2000119
(1) 鈴木鎮一は、ベルリンで師事したカール・クリングラーから弓の構えや楽句法、アゴーギクなどの点でドイツ語圏／中欧系の伝統的な演奏スタイルを受け継いだ。例えば、テンポの揺らし方は、フーゴー・リーマン流の楽句法とアゴーギクに基づくヨアヒム四重奏団の演奏スタイルに近く、一方、いわゆる「新即物主義」的な傾向を指向するより若い世代のスタイルとは異なっている。他方、ヴィブラートの常時使用という新世代の特徴を採り入れていることは、レコードからの影響を窺わせる。特にフランクのヴァイオリン・ソナタの録音は、テンポ変動の曲線が全体としてジャック・ティボーが 1923 年に録音した演奏との顕著な類似を示しており、例えば同時代のアルフレッド・デュボワのそれとは明確に異なっている。その一方で、ボウイングやフィンガリング、ポルタメント、フレージング、ヴィブラートなどは鈴木独自のものであり、これは（ヴィブラートを除き）クリングラーから受け継いだ基礎的演奏技法に起因すると思われる。また、ベートーヴェンのメヌエット ト長調（WoO 10-2）を例に、フリッツ・クライスラーと鈴木、そして鈴木の生徒、豊田耕兒の録音を比較してみると、テンポ変動の曲線がほぼ一致し、レコード及び師弟関係を通じて演奏様式が受け継がれていることが窺われる。このように、鈴木の個人的演奏様式は、ヨーゼフ・ヨアヒムの系譜を引くドイツ語圏／中欧系の演奏伝統を基盤としながらも、そこにレコードの介在を通じた独自の方向性が加味されることで形成されたことが明らかになった。これは、一つの流派に回収されず、国や地域に縛られない、新しい近代的演奏家形成のかたちを示しており、それは事実上、レコード文化の成立によってこそ実現可能となったという面が大きい。
(2) 本研究で演奏分析に用いた音響解析ソフト Sonic Visualiser における、音高及び倍音成分の分析のためのスペクトログラム機能については、周波数分解能と時間分解能がトレードオフの関係にあり、その両者に目配りをしつつ分析の目的のために最適化された設定を行う必要がある。しかしそれでも、ヴィブラートのように短い時間でわずかな周波数範囲をピッチが変化する奏法についての分析など、スペクトログラムの目視だけでは難しいケースもある。その場合でも、十分な音楽経験と音楽理解を持つ研究者がこのソフトを用いることで、コンピューターが持つ性能の限界にもかかわらず、ある程度精度の高い分析が可能になると考えられる。
(3) 鈴木鎮一の自伝的記述や学習者向けの教育的言説には、鈴木自身、奏法研究のためにレコードを繰り返し深く聴き込んだこと、そして「レコードを通して師事する」ことの勧めが頻繁に現れる。その根底には、特段の個人的交流のなかった名手たちとの間に、レコードを介して深い人格的結びつきにまで至る個人的関係を築きうるとの彼自身の経験と信念があった。その背景として、鈴木が 1920 年代という、ドイツのレコード産業が第一次世界大戦の打撃から立ち直って急成長を遂げた時期に、レコード産業の一大中心地であったベルリンに滞在していたことも無関係ではないと考えられる。当時のレコード雑誌からは、いわゆる「ヴァイマル文化」の隆盛を背景に、モダンで豊かな文化生活に必須のアイテムとしてのレコードの存在が称揚されていたこと、またすでに非常に高度な鑑識眼を持つレコード愛好家層が形成されていたこと、そしてレコードの販路拡大を視野に入れたレコードの使途の拡大が盛んに模索され、中でも教育用ツールとしてのレコードの活用方法に関して熱い議論が繰り広げられていたことなどがわかる。また、時を同じくして、日本においても蓄音機とレコードが全国津々浦々に広く普及するようになっていた。こうした時代状況やタイミングも、鈴木がレコードという新興のメディアに着目し、音楽教育に活用するようになる背景として、少なからぬ意味を有していたのではないかと考えられる。
(4) 鈴木鎮一の音楽家・教育家としての形成にとって、ヴァイオリン製造家、鈴木政吉を父に持ったことは、単にヴァイオリンという楽器との親密な関係性の中における生育環境や、ベルリン留学を可能にした財政基盤を与えたという以上に、政吉が持っていた世界大の視野とチャレンジ精神、既成概念にとらわれない進取の気象という面でも、「レコードを通して師事する」という新しい演奏家形成のあり方を模索した鎮一への大きな影響があったと考えられる。逆に、鎮一のベルリン留学を通じて、政吉はヨーロッパのヴァイオリン芸術の高みに触れ、「後世に遺すべき名器の製作」に奮起し、長男の梅雄や鎮一がその楽器を持ってヨーロッパのヴァイオリニストたちを訪ね試奏してもらうなど、父子の間では生産的な相互作用が機能していた。
(5) 昭和戦前期の東京音楽学校における演奏会の記録を確認すると、フランク作品は、1900 年

代にノエル・ペリーが教鞭を執っていた頃のオルガン用の小曲、1916 年 11 月 16 日の皇后行啓演奏会におけるヴァイオリン・ソナタの第 2 楽章から第 4 楽章（多久寅と萩原英一による）など、散発的に見られるのみであるが、昭和期になるとピアノ作品《交響的変奏曲》と《前奏曲、コラールとフーガ》が繰り返し取り上げられるようになる。ヴァイオリン・ソナタも 1937～1943 年に 4 回演奏されている（うち 2 回は第 3、4 楽章のみ）。しかし、全体として見るならば、その演奏頻度や、演奏曲目全体に占める割合は決して高いものとは言えない。これに対し、1930 年に創刊されたレコード雑誌『ディスク』(創刊当初の誌名は『ザ・グラモヒル』)を見ると、当時新たに形成されつつあった、独自の価値観を共有するレコード愛好家のコミュニティにおいて、フランクは最も大きな関心を集めていた作曲家の一人であり、関連する記事も数多く掲載されている。そこでは例えばフランクのヴァイオリン・ソナタは、ほとんど熱狂的とも呼べるほどの高い評価を受けている。さらに興味深いのは、この雑誌には鈴木鎮一とその弟、喜久雄がしばしば寄稿しており、それだけでなく、この雑誌の読者を会員として、鎮一が帰国後に弟たちと結成した鈴木カルテットの同好会的演奏会がしばしば開催されている事実である。これは、鈴木鎮一の音楽活動が、レコード愛好家のコミュニティの存在を常に視野に入れ、それとの密接な関係において展開されていたことを示している。

(6) 鈴木鎮一は、子供を含めすべての人間が持つ潜在的な才能を開花させることを教育の使命と位置づけていた。日本における早教育は、『赤い鳥』時代の「教育で天才は作ることができる」という議論に端を発し、木村久一の『早教育と天才』（1917）においてその基盤が据えられた。例えば木村は、子供の頃からきちんとした正確な大人の言葉を日常的に聴いて育つことの重要性を力説したが、これはよい演奏のレコードを毎日聴く、という鈴木鎮一の奨める学習法とも相通ずる。こうした動きを背景に、1930 年代に入る頃には新聞やラジオで高度な技能を持つ「天才少年・少女」が盛んに取り上げられ、新聞社が主催する各種コンクールでも若年層が次々と入賞するようになる。4 歳で鈴木の門下に入った江藤俊哉もこうした形で脚光を浴びたが、鈴木自身は「天才凡人は生まれつき」という考えには反対であった。しかし、彼の幼児教育の成果がメディアを通じて広く知られ社会的評価を得たことが、その後の「才能教育」の展開に追い風となったことは否めない。一方この頃になると、国家主義政策の下、自ら主体的に、社会に有用な形で、国家目標と一体化した自己実現を目指す子供の「錬成」、すなわち総力戦体制における「少国民」までを含めた総動員が呼びかけられるようになる。これは、主として富裕な市民層の子女を中心に展開していた大正期以来の「天才教育」とは異なり、全員を一人残らず高い能力を持った人間に育て上げることを目指していた。これは、鈴木が『力強き教育』（1941）等で説いた、「すべての子供を一人残らず立派な日本人とすることの出来る道」とも呼応している。さらに彼は、入学前の早教育や家庭教育、考えさせるよりも模倣訓練により「身につける」ことの重要性も強調した。これは期せずして、木村久一流の早教育論と、落ちこぼれを作らず全員に水準以上の能力を発揮させる「少国民総動員」論とが接続された形になっていると見ることもできる。一方、鈴木の独自な点は、彼の理念の実現を助ける効果的なツールとしてレコードを採り入れた点である。以上のように、鈴木の「才能教育」は、決して何もないところから彼自身の個人的思考のみによって生まれて来たのではなく、時代の流れの中で、さまざまな形で社会と関わる中から醸成されて行った面も大きいと考えられる。

以上の概要で示したように、本研究は、演奏の技法や様式に関する分析と、その歴史的コンテクスト、とりわけ社会文化的背景に光を当て、複数の異なる視点からそれら相互の関係性をあぶりだそうとした試みである。この研究を通じ、これまで注意を向けられることが比較的少なかったさまざまな同時代的事象どうしの相互関係が浮き彫りとなり、そこから興味深い図柄が浮かび上がってきた。問題提起や論点の示唆にとどまった事柄も少なくないが、ここで取り上げられたトピックや研究方法、及び得られた結論は、今後さらにこの分野で研究を進めて行く上での土台としての役割を果たせるものと期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 太田峰夫	４．巻 53
２．論文標題 「ハンガリーのピアノ」をめぐるナショナリズムとオリエンタリズムーーヨーカイ・モール『年老いる頃にMire megvenulunk』（1865）における打弦楽器ツィンバロムの表象についてーー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ハルモニア	６．最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 OTA Mineo	４．巻 -
２．論文標題 Joachim and Romani Musicians: Their Relationship and Common Features in Performance Practice	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Creative Worlds of Joseph Joachim, edited by Valerie Woodring Goertzen & Robert Whitehouse Eshbach (Woodbridge, Suffolk: Boydell & Brewers)	６．最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丸井淳史	４．巻 40 (1)
２．論文標題 一対比較法と多次元尺度法を使った楽器音色の主観評価事例	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本音響学会 音楽音響研究会	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹内朗、丸井淳史、亀川徹	４．巻 40 (7)
２．論文標題 サクソフォーンの演奏強度による音色変化の評価	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本音響学会 音楽音響研究会	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹内朗、丸井淳史、亀川徹	４．巻 39 (8)
２．論文標題 サクソフォーンの演奏強度による音色変化の評価	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本音響学会 音楽音響研究会	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊豊宇、亀川徹、丸井淳史	４．巻 39 (8)
２．論文標題 異なる残響環境における箏演奏音の主観評価の違いについて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本音響学会 音楽音響研究会	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土田英三郎	４．巻 0
２．論文標題 ルードルフ・ディットリヒ「日本音楽を知るために：海外における日本音楽受容史の１史料」（解題・訳・注解）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 土田英三郎ゼミ有志論集編集委員会編『音楽を通して世界を考える』（東京藝術大学出版会）	６．最初と最後の頁 10-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺裕	４．巻 88
２．論文標題 「空耳」文化のすすめ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アステイオン	６．最初と最後の頁 132-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺裕	4．巻 89
2．論文標題 「校歌」以前の校歌？	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アステイオン	6．最初と最後の頁 146-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺裕	4．巻 90
2．論文標題 ポスト・トゥルースの時代と歴史映画	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アステイオン	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takahide Etani, Atsushi Marui, Satoshi Kawase, and Peter Keller	4．巻 9
2．論文標題 Optimal Tempo For Groove: Its Relation to Directions of Body Movement and Japanese Nori.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Frontiers in Psychology	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2018.00462	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 志野文音、丸井淳史、亀川徹	4．巻 75-1
2．論文標題 クラシックギターにおける弾弦位置と異弦同音の違いが音色印象に与える影響	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本音響学会誌	6．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hengwei Su, Atsushi Marui, and Toru Kamekawa	４．巻 67
２．論文標題 The Auditory Source Widening Effect in Binaural Synthesis with Spatial Distribution of Frequency Bands.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of the Audio Engineering Society	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計22件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 井上さつき
２．発表標題 幻のヴァイオリンを求めて～日本のヴァイオリン王　鈴木政吉の物語～
３．学会等名 宗次スイーツタイムコンサート（レクチャーコンサート）
４．発表年 2022年

１．発表者名 井上さつき
２．発表標題 発明家　鈴木政吉
３．学会等名 鈴木政吉生誕祭～記念講演会とコンサート
４．発表年 2022年

１．発表者名 井上さつき
２．発表標題 「バイオリンの里構想」の推進について、歴史的観点から考える
３．学会等名 大府市令和4年度有識者懇話会
４．発表年 2022年

１．発表者名 井関幸平，丸井淳史，亀川徹
２．発表標題 ヴィオラ演奏における「ヴィオリストらしさ」について
３．学会等名 日本音響学会 音楽音響研究会 第41巻 第1号（MA2022-04）
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉田羽那，上原崇寛，児玉秀和，亀川徹，丸井淳史
２．発表標題 ギター弦の弾き比べによる主観評価と音響的・物性的検討
３．学会等名 日本音響学会 音楽音響研究会 第41巻 第x号（MA2022-xx）
４．発表年 2023年

１．発表者名 甲斐朝花
２．発表標題 ヴァイオリン演奏解釈の身体化――19世紀後半～20世紀におけるアウアー・メソッドを中心に――
３．学会等名 日本音楽学会東日本支部第76回定例研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 太田峰夫
２．発表標題 バルトークの作品観のなかでの自作自演録音の美学的位置づけ ――「ブルガリアン・リズム」にかかわる事例を中心に
３．学会等名 第72回日本音楽学会全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤彰教、亀川徹、　丸井淳史
２．発表標題 二重奏の演奏音に異なる残響を付与した場合の空間印象の比較
３．学会等名 音楽知覚認知学会 2021年度秋季研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 澤和樹、大角欣矢
２．発表標題 第2回野澤コレクションでたどるヴァイオリン演奏の系譜～シモン・ゴールドベルクを中心に～
３．学会等名 東京藝術大学 SPレコードを用いたヴァイオリン演奏史研究プロジェクト：レクチャー・レコードコンサート（2019年7月19日）
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺裕
２．発表標題 『文化資源』としてのレコード：変容する感性とうつろいゆく価値のはざまで
３．学会等名 新潟大学環東アジア研究センター講演会「大衆文化を資源として捉え直す：レコードからアニメへ」（2019年12月21日）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 劉潔瑩、亀川徹、丸井淳史
２．発表標題 歌声における感情のビブラート表現
３．学会等名 日本音響学会音楽音響研究会 第38巻 第9号 (MA2019-63)、筑波大学（2020年2月29日）
４．発表年 2020年

１．発表者名 野平一郎、土田英三郎、平野昭
２．発表標題 ベートーヴェンの変奏曲
３．学会等名 日本ベートーヴェンクライス、例会、2018年６月24日、音楽之友社別館フェニックスルーム、『ベートーヴェン通信』第９号
４．発表年 2018年

１．発表者名 野平一郎、土田英三郎、平野昭
２．発表標題 ベートーヴェンを語る：ベートーヴェンの弦楽四重奏曲について
３．学会等名 日本ベートーヴェンクライス、例会、2018年12月31日、東京文化会館会議室 、『ベートーヴェン通信』第10号
４．発表年 2018年

１．発表者名 土田英三郎、島根朋史
２．発表標題 若きベートーヴェンとチェリストたちの挑戦：チェロ・ソナタにおける伝統と革新
３．学会等名 日本ベートーヴェンクライス、レクチャー・コンサート、2019年３月25日、近江楽堂、『ベートーヴェン通信』第10号
４．発表年 2019年

１．発表者名 安達万純、亀川徹、丸井淳史
２．発表標題 オーボエ演奏音における遠鳴り・そば鳴りに関する検討
３．学会等名 日本音響学会音楽音響研究会 第37巻 第1号 (MA2018-01)、東京藝術大学、2018年4月14日
４．発表年 2018年

１．発表者名 萩原みず穂、丸井淳史、亀川徹
２．発表標題 「かわいい音」に関する評価語の分類
３．学会等名 日本音響学会音楽音響研究会 第37巻 第1号 (MA2018-03)、東京藝術大学、2018年4月14日
４．発表年 2018年

１．発表者名 Atsushi Marui and Toru Kamekawa
２．発表標題 Does Spectral Flatness Affect the Difficulty of the Peak Frequency Identification Task in Technical Ear Training?
３．学会等名 144th Convention, Audio Engineering Society, Paper No. 9945. Milan, Italy, May 2018.
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayu Kasahara, Atsushi Marui, and Toru Kamekawa
２．発表標題 Evaluation of Player-controlled Flute Timbre by Flute Players and Non-Flute Players
３．学会等名 144th Convention, Audio Engineering Society, Paper No. 9950. Milan, Italy, May 2018.
４．発表年 2018年

１．発表者名 Koji Tsumoto, Atsushi Marui, and Toru Kamekawa
２．発表標題 The Standard Deviation of the Amplitude Spectrum as a Predictor of the Perception of the Power of Distorted Guitar Timbre
３．学会等名 144th Convention, Audio Engineering Society, Paper No. 9971. Milan, Italy, May 2018.
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤峻、吉川さとみ、亀川徹、丸井淳史
２．発表標題 箏曲における邦楽合奏の楽器配置に関する研究
３．学会等名 日本音響学会音楽音響研究会 第37巻 第1号 (MA2018-32)、NHK放送技術研究所、2018年8月25日
４．発表年 2018年

１．発表者名 安達万純、亀川徹、丸井淳史
２．発表標題 遠鳴り・そば鳴りを考慮したオーボエ演奏音に対する音色の評価について
３．学会等名 日本音響学会音楽音響研究会 第37巻 第1号 (MA2018-73)、岐阜工業高等専門学校、2019年1月26日
４．発表年 2019年

１．発表者名 Atsushi Marui and Toru Kamekawa
２．発表標題 Does Spectral Flatness Affect the Difficulty of the Peak Frequency Identification Task in Technical Ear Training? (Part 2)
３．学会等名 146th Convention, Audio Engineering Society, Engineering Brief 521. Dublin, Ireland, March 2019.
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 丸井淳史	４．発行年 2023年
２．出版社 コロナ社	５．総ページ数 300
３．書名 日本音響学会編『音響学講座9 音楽音響』中「第4章 音楽情報処理 第4節 音響合成」（249-263頁）	

１．著者名 鷲田清一、佐々木幹郎、山室信一、渡辺裕	４．発行年 2018年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 272
３．書名 大正＝歴史の踊り場とは何か――現代の起点を探る	

１．著者名 渡辺裕	４．発行年 2019年
２．出版社 春秋社	５．総ページ数 384
３．書名 まちあるき文化考――交叉する〈都市〉と〈物語〉	

１．著者名 土田英三郎（翻訳及び付論・後書き）	４．発行年 2018年
２．出版社 音楽之友社	５．総ページ数 368
３．書名 マーク・エヴァン・ボンズ『ソナタ形式の修辞学：古典派の音楽形式論』	

１．著者名 井上さつき、大角欣矢、太田峰夫、甲斐朝花、丸井淳史、渡辺裕	４．発行年 2024年
２．出版社 ウェブ出版 https://geidai.repo.nii.ac.jp/records/2000119	５．総ページ数 85
３．書名 シンポジウム「鈴木鎮一と音楽の近代――ＳＰレコード音源とその社会文化的背景の検証を通じて――」報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	太田　峰夫 (Ota Mineo) (00533952)	京都市立芸術大学・音楽学部・教授 (24301)	
研究分担者	井上　さつき (Inoue Satsuki) (10184251)	愛知県立芸術大学・音楽学部・名誉教授 (23902)	
研究分担者	片山　杜秀 (Katayama Morihide) (80528927)	慶應義塾大学・法学部（日吉）・教授 (32612)	
研究分担者	丸井　淳史 (Marui Atsushi) (90447516)	東京藝術大学・音楽学部・教授 (12606)	
研究分担者	渡辺　裕 (Watanabe Hiroshi) (80167163)	東京大学大学院・人文社会系研究科・名誉教授 (12601)	
研究分担者	土田　英三郎 (Tsuchida Eizaburo) (10143645)	東京藝術大学・音楽学部・名誉教授 (12606)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	甲斐　朝花 (Kai Asaka)	東京大学大学院・総合文化研究科・博士課程	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関